

ピラミッドの新たな謎

吉村作治氏 東日本国際大学学長／
早稲田大学名誉教授

考古学は観光の魅力の発見にもつながる学問で、旅行業界にとって興味深い分野だ。なかでもエジプト考古学には、旅行のモチベーションを“発掘”してくれる期待がかかる。5月例会では、この分野の第一人者である吉村作治氏が講演し、最新情報を伝えた。

吉村氏は50年前にカイロ大学で発掘調査に関わって以降、発掘調査を続けている。開始から10年目に200体ものミイラを発見。87年には電磁波探査レーダーを使って「クフ王の第2の太陽の船」を発見し、93年には穴からマジックハンドを使って木片を取り出すことに成功した。その後、09年からは発掘作業を開始し、人工衛星の画像解析で未盗掘の墓を発見するなど、多くの実績を上げた。それは、生存する学者の中で未盗掘遺跡の発掘数が3番目に多いという数字にも表れている。

長年にわたり、エジプト考古学に携わってきた吉

村氏がいま最も興味を持っているのが、ピラミッドの建設目的の解明だ。そもそもピラミッドが何のために作られたのかは多くの人が抱く疑問だが、「ピラミッドは王墓であるというのが日本では定説として信じられているが、世界的には王墓説を唱える学者は少数派になりつつある」（同）という。

吉村氏は「王墓でないことは明白で、大規模公共事業だったこと、何らかの宗教施設だったのは間違いない」と断言する。エジプトに140もあるピラミッドのいずれから、一体も王の亡骸が発見されていないためだ。クフ王の父などは5つもピラミッドを建設したなど、1人の王が複数のピラミッドを作っていることも王墓説とは合致しない。また、古代エジプトの王たちが税として集めた富を人民に再配分するための大規模公共事業だったという説が1903年に唱えられ、米国のニューディール政策のヒントになったという研究もある。

エジプトに新たな観光の目玉

今年から来年にかけて、カイロに新たなエジプト博物館が開業する。吉村氏がその展示の目玉としたいと考えているのが、自身が発掘した「第2の太陽の船」だ。

1954年にギザの大ピラミッドの東側で世界最古の大型木造船である「第1の太陽の船」が発見されたが、吉村氏はこれを66年に現地で初めて見た時から、西側にも船があると見通していた。古代エジプトでは対称やバランスが重視される傾向があったためだ。

実際、同氏が予想したとおり、ピラミッドの西側で「第2の太陽の船」を発見する。以降、本格的な発掘作業に向けて尽力し、約20年かけて発掘作業にこぎ着けた。2011年からはエジプト考古学庁と共同で本格的な発掘が始まっており、今後4年をかけて作業を完了できる見込みという。



Profile

よしむら・さくじ●1943年東京生まれ。エジプト考古学者。66年早稲田大学古代エジプト調査隊を組織して現地に赴いて以降、約半世紀にわたり発掘調査を継続。2005年には未盗掘の完全ミイラ、軍司令官セヌウの木棺を発見し、国際的な評価を高めた。